

洛西竹林公園石仏調査レポート2

— 石 造 物 —

丸川 義広

1. はじめに

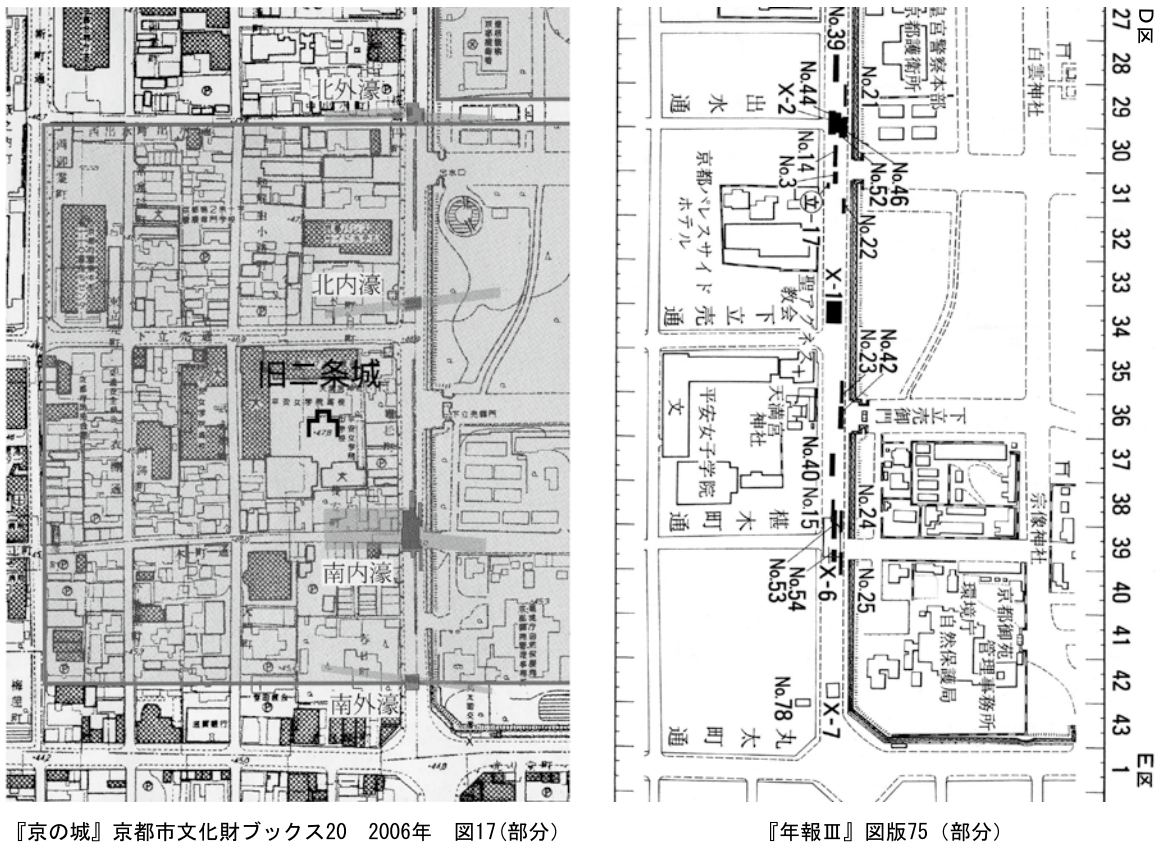
昭和56年（1981）6月に開園した京都洛西竹林公園（以下「竹林公園」とする）には、東端の一角に地下鉄烏丸線建設に伴う調査（以下「烏丸線」）で出土した石仏・石造物（合わせて「石造物群」）が野外展示されている。そのうちの石仏については、先に拙稿で解説した（『洛西竹林公園石仏調査レポート』『洛史 研究紀要 第11号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年、以下「前稿」）。本稿はその続編であり、前稿で触れなかった石造物144点について報告する。調査方法と構成については前稿と同じであるが、前稿で触れなかった烏丸線調査の成果を最初に概述する。

2. 地下鉄烏丸線の調査と旧二条城（図1・表1）

洛西竹林公園に展示されている石造物は、1974～1979年度に実施された地下鉄烏丸線建設工事に伴う調査で出土したものである。調査後に作成された報告書（『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調

表1 烏丸線調査地点一覧表（『年報Ⅲ』表-40を調整）

調査の種類・地区		1974年度	1975年度	1976年度	1977年度	1978年度	1979年度	計
トレンヂ調査	B区				No.75			1
	C区	No.1, 7, 10	No.30~33	No.45			No.79	9
	D区	No.2, 3, 8, 9, 11~15	No.16, 21~26	No.39, 40, 42, 44, 46, 52~54			No.78	25
	E区	No.4	No.17~20, 27~29	No.59, 60	No.63			11
	F区	No.5			No.62, 64~68			7
	G区	No.6	No.38	No.41, 43, 47~51			No.80	10
	H区		No.34~37	No.55~58, 61	No.71~73	No.76	No.77	14
	I区				No.69, 70, 74			3
	小計	15 (No.1~15)	23 (No.16~38)	23 (No.39~61)	14 (No.62~75)	1 (No.76)	4 (No.77~80)	80
覆工板下調査	B区							0
	C区			X-3				1
	D区			X-1, 2	X-6, 7			4
	E区							0
	F区							0
	G区			X-4				1
	H区				X-5			1
	I区							0
	小計	0	0	4 (X-1~4)	3 (X-5~7)	0	0	7
立会い調査	B区							0
	C区							1
	D区	㊸-1~9	㊸-10~15	㊸-16 ㊸-17			㊸-23	16
	E区							1
	F区							0
	G区			㊸-18	㊸-19			2
	H区					㊸-20, 21 ㊸-22		2
	I区							1
	小計	9 (㊸-1~9)	6 (㊸-10~15)	3 (㊸-16~18)	1 (㊸-19)	3 (㊸-20~22)	1 (㊸-23)	23
総計	24	29	30	18	4	5	110	
		『年報Ⅰ』		『年報Ⅱ』	『年報Ⅲ』			



『京の城』京都市文化財ボックス20 2006年 図17(部分)

『年報Ⅲ』図版75(部分)

図1 旧二条城の位置と烏丸線調査区配置図

『年報』以下『年報〇』¹⁾によると、調査年度と調査区の配置は『年報Ⅲ』表-40に整理されている(表1)。それを参考にする、1974・75年度には榎木町通延長部で実施した「No.15」「No.24」「No.25」などで石垣を伴う堀(報告では「濠」)を検出し、石仏・石造物が多用されることから、永禄12年(1569)に織田信長が將軍足利義昭のために建造した武家御城(遺跡名:旧二条城)に伴う遺構と理解された(『年報Ⅰ』所収)。その後、1976年度に出水通延長部で実施した「No.44」「No.52」「X-2」、下立売通延長部の「X-1」、榎木町通延長部の「No.53」「No.54」で堀・石垣を検出し、城の北端が出水通に達することが確定した(『年報Ⅱ』所収)。1977年度には榎木町延長部で実施した「X-6」、丸太町通上る延長部の北側で実施した「X-7」で堀・石垣を検出し、南端が丸太町通北端から北へ約35mに位置することも判明した(『年報Ⅲ』所収。図1参照)。

烏丸線の調査は市街地の主要道路路面で実施するという制約の多い調査ではあったものの、南北方向の点的な調査を積み重ねることで旧二条城の南北範囲を明らかにするとともに、二重の堀を巡らせた本格的な城郭で、堀には石垣が伴うこと、石材として石仏・石造物が多用されることを明らかにした。切迫した築城時の政治情勢をうかがい知る重要な成果といえる。

3. 石造物の出土状態(表2・3)

烏丸線調査で出土した石仏と石造物については、それぞれの報告書で代表的な個体の写真が掲載されているものの、多くの実測図・写真は公表されていない。写真が掲載された個体は、『年報

表2 烏丸線調査出土石造物一覧表（『年報Ⅲ』表-38に追記）

地 区	石 仏								石 造 物														総 計		
	一 尊 仏					四 方 計	石 碑			石 塔					建 材				そ の 他	石 造 物 計					
	阿 弥 陀	薬 師	地 藏	弥 勒	不 明		尊 仏	尊 仏	供 養 碑	不 明	計	五 輪 塔	宝 篋 印 塔	層 塔	灯 籠	不 明	計	礎 石			礎 盤	不 明		計	
中立売～上長者町 溝	39	1	3		7	6	2		58	4		④	5					⑤	2			②	⑬	28	86
上長者町～出水 溝									2		②	3						③						5	5
計	39	1	3		7	6	2		58	6	6	8						8	2			2	17	33	91
出水	濠	26		1		15	1		43				2	1				③	1	1		②		5	48
下立売	濠	14	1	1		4	5	1	26	14	1	⑮	4		4	2	7	⑰	5	1		⑥	⑬	51	77
榎木町	濠	37		4	1	13	3	1	62	5		⑤	2		1			③	5			⑤	⑤	18	80
丸太町(上ル)	濠	16		2		8	1		28	6	2	⑧	7		1			⑧	4		4	⑧		24	52
計		93	1	8	1	40	10	2	159	25	3	28	15	1	4	4	7	31	15	2	4	21	18	98	257
総 計		132	2	11	1	47	16	4	217	31	3	34	23	1	4	4	7	39	17	2	4	23	35	131	348

I』図版34で石造物3点（供養碑1・礎石1・層塔軸部1）、図版35で石造物1点（供養碑）、『年報Ⅱ』図版51で石造物9点（供養碑4・五輪塔1・笠3・礎盤1）、『年報Ⅲ』図版73で石造物1点（層塔軸部）、図版74で石造物9点（供養碑6・灯籠竿1・唐石敷1・礎石1）である。

出土地点と個数については、『年報Ⅲ』表-38で整理されている（表2）。この表によると、出水通延長部から出土した石造物は5点、下立売通延長部からは51点。榎木町通延長部からは18点、丸太町通上るからは24点で、合計98点となる。しかしこれでは、竹林公園に展示された石造物144点には大幅に足りない。ところがこの表では「中立売～上長者町 溝」からも石造物が28点、「上長者町～出水 溝」からも5点出土しており、これらを加えると131点となり、竹林公園に展示された実数に近い。

改めて出土した点数を整理する。表2で示した『年報Ⅲ』表-38によると、石碑34、石塔39、建材23、その他35で合計131点とある。これに対し文化財保護課が保管する石造物群設置時に作成された資料（以下、「資料」）では、石碑26、石塔56、石製器具19、建材21、その他43で合計158点とある。しかし資料中には二本線で消去した跡が石碑で3箇所、石塔で1箇所、石製器具で12箇所、建材（なし）、その他で7箇所にあり、
 実際は、石碑23、石塔55、器具7、建材21、その他36の合計142点が現地に配置されたと推定できる。資料に付属する測量図の書き込みは、石碑23、石塔55、器具7、建材21、その他36の合計142点であり、資料の数値と一致することはその裏付けとなりうる（表3）。

表3 石造物の種類と個数

『年報Ⅲ』表-38		「資料」配置図		「資料」一覧表	
種 類	個 数	種 類	個 数	種 類	個 数
石 碑	34	石 碑	23	石 碑	23 (26-3)
石 塔	39	石 塔	55	石 塔	55 (56-1)
—	—	器 具	7	石製器具	7 (19-12)
建 材	23	建 材	21	建 材	21
その他	35	その他	36	その他	36 (43-7)
合 計	131	合 計	142	合 計	142

(-○)は配置せず

4. 竹林公園に設置された石造物（図2・表4・写真1）

作業方法 全体の配置を把握するため概略図を作成した。次いで、群（列）を任意に設定し、石造物に個々の名称を与えた。こうした作業を経ると、石造物は無造作に置かれたものではなく、類似するものを選別して置かれたことが明確となる。石造物個々はデジタルカメラで撮影し、要点を表4に整理した。図2は、前稿時に作成した配置図を、石仏は白抜き、石造物は黒塗りにしたものである。

個数・配置・区分 石造物群は竹林公園の南東隅の一角で、「西の岡竹林通」と名付けられた道路の西側に展示されている。展示区域をおおまかにみると、「池」に見立てた低い側と「築山」が築かれた高い側に区分できる。そして導入路である西側から進むと園路は二股に分かれ、左に進むと池を横切るかたちで南に折れて築山の東、南裾を周回して元の二股の園路に戻る。石仏と石造物は園路に沿って配置されているが、手前には金属柵があり石造物群に直接触れることはできない。園路から離れた場所に置かれた個体も、間近で観察することはできない。²⁾

石造物144点はア群～タまでの16群（列）に配置されている。³⁾

ア群：池内部の北端に礎石、層塔の石柱、唐石敷、石樋など11点が配置される。

イ列：池内部の南寄りに礎石8点が飛石風に並べられ、池内を往来する施設となっている。

ウ群：池内部の南端に灯籠、加工された石材5点が配置される。中央に置かれた灯籠（ウ3）は竿（ウ3-1）、笠（ウ3-2）、宝珠（ウ3-3）の3段重ねで、実際の点数は7点となる。

エ列：石仏B列の延長に、北半に礎石、南半に石臼など20点が置かれる。エ9は石仏の光背部で仏身は削り取られている。エ20の先には自然石が7点置かれるが、これらは資料にも記載がなく、旧二条城出土品と誤解される恐れがある。

オ列：築山の東裾で石仏G列の延長に、加工された石材など12点が置かれる。

カ群：築山の頂上部に五輪塔、石塔が11基配置される。資料の測量図は10点で、のちカ11が追加されたようである。カ4（3点）・カ5（4点）・カ7（2点）・カ8（3点）・カ9（4点）は複数の石材を積んでおり、実際の点数は22点となる。

キ列：カ群の東側に接するかたちで五輪塔の風・空輪と宝篋印塔の相輪など11点が一行に配置される。

ク列：築山の東裾で二股に分かれた高い側をク列とする。五輪塔の火輪、宝篋印塔の笠など8点が一行に配置される。いずれも屋根型を呈し、類似するものが集められたようである。

ケ列：二股に分かれた裾側をケ列とする。五輪塔の火輪9点が一行に配置される。種類はク列と同じ火輪であるが、規模はク列より小型である。

コ列：南端に配置された供養碑3列のうち一番手前（北側）の列で、供養碑など11点が一行に配置される。資料の測量図は8点が描かれ、後に3点追加されたようである。右端の3～4点は樹木に隠れて確認しにくい。

サ列：南端に配置された供養碑3列のうちの真中の列で、供養碑9点が一行に配置される。資料

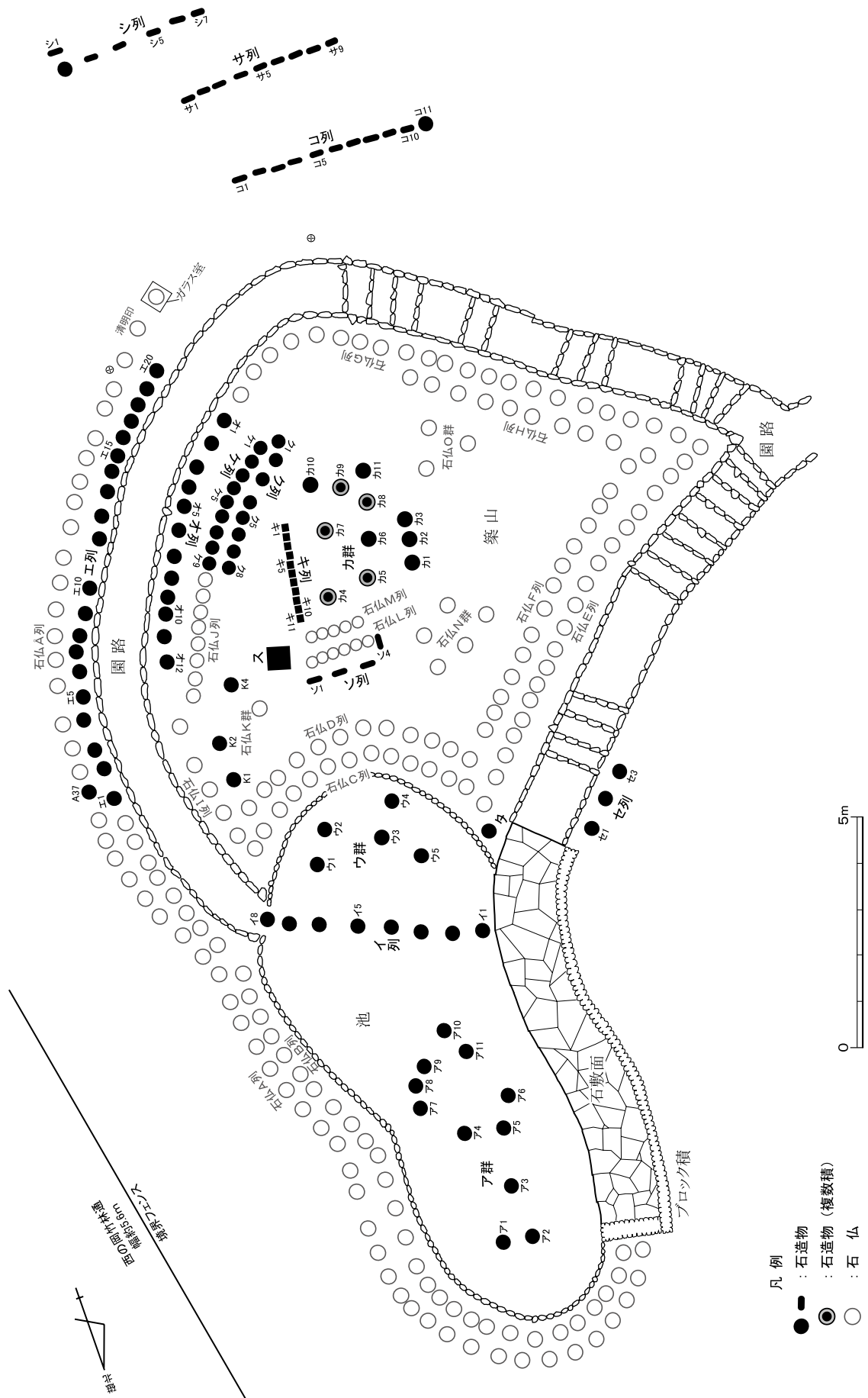


図2 竹林公園展示石造物・石仏配置図 (前稿の図1を改訂)

表4 石造物一覧表(現状での群・列ごと)

群列	種類	観察所見	資料の番号・出土地・種類	東西通名、地点・『年報〇』掲載・備考
ア1	加工石材	石柱状、断面四角形	タ9 No.15 ー	榎木町通、城内『年報Ⅰ』
ア2	石塔	断面八角形、中央に太柄	ケ20 X-7 ー	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
ア3	唐石敷	上面に方形穴、大小2	タ39 X-6 ー	榎木町通、城内『年報Ⅲ』図版74 X6-23
ア4	層塔	軸部、四面に仏像を浮彫	フ188 X-6 四方仏	榎木町通、城内『年報Ⅲ』図版73 X6-20
ア5	礎石	隅丸方形の柱座、中央に太柄	ケ15 X-6 礎石 方形	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
ア6	礎石	円形の柱座、一方向に出	ケ10 X-1 礎石	下立売通上、城内『年報Ⅱ』
ア7	加工石材	縦方向に二条の窪み	タ10 D19~20E ー	上長者町通上る、北外 4個で十字形
ア8	加工石材	縦方向に二条の窪み	タ38 X-6 ー	榎木町通、城内『年報Ⅲ』 4個で十字形
ア9	加工石材	縦方向に二条の窪み	タ34 X-6 ー	榎木町通、城内『年報Ⅲ』 4個で十字形
ア10	石樋	凝灰岩礫岩を加工	ケ9 No.27 トユ	竹屋町通、南外『年報Ⅰ』
ア11	石樋	凝灰岩礫岩を加工	ケ8 No.27 トユ	竹屋町通、南外『年報Ⅰ』
イ1	礎石	円形の柱座	ケ14 No.16 礎石	上長者町通、北外『年報Ⅰ』
イ2	礎石	円形の柱座は磨滅、石材が黄色系	タ36 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
イ3	礎盤	上面にホゾ穴、側面2方向に欠込み	ケ11 D31WⅡ~Ⅲ 礎盤 ホゾ2か所	出水通下る、城内『年報Ⅱ』図版51 X1-20 X-1濠1 石垣3 地点不一致
イ4	礎石	円形の柱座	ケ17 X-6 礎石	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
イ5	礎石	円形の柱座は磨滅	ケ13 X-1 礎石 方形	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
イ6	礎石	円形の柱座は磨滅	ケ18 ー 礎石	不明
イ7	礎石	円形の柱座	ケ4 No.25 礎石	榎木町通、城内『年報Ⅰ』図版34 No.25-4 No.25濠1
イ8	礎石	円形の柱座、上面に水の穿穴跡	タ41 No.48 ー	仏光寺通、南外『年報Ⅱ』
ウ1	加工石材	方形	タ8 石垣9 ー	不明
ウ2	加工石材	長方形	タ37 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
ウ3-1	灯籠	竿	ト49 X-6 灯籠の竿	榎木町通、城内『年報Ⅲ』図版74 X6-22 X-6濠1
ウ3-2	灯籠	笠、葺手は3か所残存	ト42 X-1 灯籠の笠 六角形	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』 竿に笠を乗せる
ウ3-3	灯籠	宝珠	ト51 X-7 空・風輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
ウ4	層塔	笠、2辺残存	ト48 ー 層塔の笠	不明
ウ5	加工石材	彎曲面あり	タ35 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
エ1	礎石	円形の柱座、一部欠損	ケ7 ー 礎石	不明
エ2	礎石	円形の柱座	ケ2 X-1 礎石	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
エ3	礎石	円形の柱座	ケ3 No.32 礎石	寺之内通~上立売通間、北外『年報Ⅰ』
エ4	礎石	円形の柱座	ケ5 No.53 礎石	榎木町通、城内『年報Ⅱ』
エ5	手水鉢	加工が粗く手水鉢に転用か?	タ30 No.15 手水鉢?	榎木町通、城内『年報Ⅰ』
エ6	礎石	礎石	ケ6 D17~18EⅡ~Ⅲ 礎石	中立売通~上長者町通、北外
エ7	加工石材	石柱状、断面四角形	ケ21 X-7 ー	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
エ8	加工石材	石柱状、断面四角形	ケ1 ー 礎石?	不明
エ9	石仏	光背部、石仏自体は削平される	タ20 No.13 ー	中立売通下る、北外『年報Ⅰ』
エ10	墓標	台座、三方に反花を表現する	タ19 No.39 台座 三方反花	出水通上る、北外『年報Ⅱ』図-7 No.39溝1「反花座」
エ11	礎石	円形の柱座	タ11 石垣19 ー	不明
エ12	礎石	方形の柱座	ケ12 D31WⅡ~Ⅲ 礎石 方形	出水通下る、城内
エ13	礎石	方形の柱座	タ13 No.13 ー	中立売通下る、北外『年報Ⅰ』
エ14	石臼	つき臼	キ1 X-6(埋戻中出土) つき臼	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
エ15	石臼	ひき臼	キ2 G4Ⅱ~Ⅲ ひき臼	綾小路通上る、南外
エ16	石臼	ひき臼(上臼)	キ4 No.17 ひき臼	竹屋町通、南外『年報Ⅰ』
エ17	石臼	ひき臼(上臼)	キ5 G25EⅡ ひき臼	万寿寺通~五条通間、南外
エ18	石臼	ひき臼	キ6 G25EⅡ ひき臼	万寿寺通~五条通間、南外
エ19	石臼	ひき臼	キ8 D11EⅡ ひき臼	一条通、北外
エ20	石臼	茶臼	キ9 G21WⅡ ひき臼	松原通~万寿寺通間、南外
オ1	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ4 石垣9 ー	不明
オ2	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ5 D18~19 ー	中立売通~上長者町通間、北外
オ3	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ7 D18~19E ー	中立売通~上長者町通間、北外
オ4	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ14 ー ー	不明
オ5	加工石材	平坦面、段差あり、礎石か?	タ17 D19~20E ー	上長者町通上る、北外
オ6	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ18 No.13 ー	中立売通下る、北外『年報Ⅰ』
オ7	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ21 D18~19E ー	中立売通~上長者町通間、北外
オ8	加工石材	石柱状、平坦面あり	タ22 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
オ9	加工石材	石柱状、自然石か?	タ25 D15EⅠ ー	中立売通上る、北外
オ10	礎石	方形の柱座	タ26 石垣9 ー	不明
オ11	礎石	円形の柱座	タ31 X-6 ー	榎木町通、城内
オ12	手水鉢	半分欠損	タ32 No.35 ー	六条通下る、南外『年報Ⅰ』

群列	種類	観察所見	資料の番号・出土地・種類	東西通名、地点・『年報〇』掲載・備考
カ1	一石五輪塔	一石五輪塔、完存	ト7 No.10 一石五輪塔	上御堂前通上る、北外『年報Ⅰ』
カ2	一石五輪塔	一石五輪塔、空輪欠	ト8 No.10 一石五輪塔	上御堂前通上る、北外『年報Ⅰ』
カ3	一石五輪塔	一石五輪塔、風・空輪欠	ト9 D17EⅡ～Ⅲ 一石五輪塔	中立売通下る、北外
カ4-1	層塔	五輪塔の地輪か？	ケ19 X-7 地輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
カ4-2	層塔	層塔の軸部、四面に仏像を浮彫	フ189 X-6 四方仏	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
カ4-3	層塔	層塔の笠	ト38 X-1 層塔の笠	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』図版51 X1-7 X-1濠1石垣1
カ5-1	五輪塔	地輪	ト32 D24EⅠ 地輪	下長者町通上る、北外
カ5-2	五輪塔	水輪	ト13 D25EⅢ 水輪	下長者町通、北外
カ5-3	五輪塔	火輪	ト22 G18WⅡ～Ⅲ 火輪	松原通、南外
カ5-4	五輪塔	空・風輪	ト3 D17～22 空・風輪	中立売通～上長者町通間、北外
カ6	一石五輪塔	一石五輪塔、風・空輪欠、大型品	ト47 No.52 一石五輪	出水通、城内『年報Ⅱ』図版51 No.52-38 No.52濠1石垣1
カ7-1	五輪塔	五輪塔の地輪	ト50 X-6 地輪	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
カ7-2	層塔	層塔の笠	ト41 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
カ8-1	五輪塔	地輪	タ12 石垣9 ー	不明
カ8-2	五輪塔	水輪、縦にヒビ割れ	ト1 No.53 水輪	榎木町通、城内『年報Ⅱ』
カ8-3	五輪塔	火輪、五輪塔としては大型品	ト19 X-1 火輪	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
カ9-1	五輪塔	地輪	ト33 D25EⅢ 地輪	下長者町通、北外
カ9-2	五輪塔	水輪	ト20 G18EⅡ 水輪	松原通、南外
カ9-3	五輪塔	火輪	ト31 G 火輪	四条通～五条通間、南外
カ9-4	五輪塔	空・風輪	ト52 X-7 空・風輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
カ10	五輪塔	地輪	ト21 D26Ⅲ 地輪	下長者町通下る、北外
カ11	一石五輪塔	一石五輪塔、空・風輪欠	ト10 No.13 一石五輪塔	下立売通下る、北外『年報Ⅰ』 資料から推定
キ1	五輪塔	地輪？	ト43 No.52 宝篋印の塔身	出水通、城内『年報Ⅱ』
キ2	五輪塔	水輪	ト14 G17W 水輪	松原通上る、南外
キ3	五輪塔	風・空輪	ト5 D37WⅠ 空・風輪	出水通、城内『年報Ⅱ』
キ4	五輪塔	水・火輪	ト55 X-7 火・水輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
キ5	五輪塔	風・空輪	ト54 X-7 空・風輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
キ6	五輪塔	風・空輪	ト6 No.52 空・風輪	出水通、城内『年報Ⅱ』
キ7	五輪塔	風・空輪	ト2 D5 空・風輪	武者小路通下る、北外
キ8	五輪塔	空輪	ト34 ー 風輪	不明
キ9	五輪塔	風・空輪	ト53 X-7 空・風輪	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
キ10	五輪塔	風・空輪	ト4 ー ー	不明
キ11	宝篋印塔	宝篋印塔or層塔の九輪	ト39 G 層塔の相輪	四条通～五条通間、南外
ク1	五輪塔	火輪	ト29 C42WⅡ 火輪	上立売通上る、北外
ク2	五輪塔	火輪	ト15 G17W 火輪	松原通上る、南外
ク3	五輪塔	火輪	ト16 D26Ⅲ 火輪	下長者町通下る、北外
ク4	宝篋印塔	笠	ト37 G4Ⅱ～Ⅲ 宝篋印の笠	錦小路通上る、南外
ク5	五輪塔	火輪	ト12 No.14 火輪	出水通下る、城内『年報Ⅰ』
ク6	五輪塔	火輪	ト30 G 火輪	四条通～五条通間、南外
ク7	五輪塔	火輪	ト25 No.14 火輪	出水通下る、城内『年報Ⅰ』
ク8	灯籠？	灯籠の火袋？	ト45 No.20 灯籠の火袋	押小路通下る、南外『年報Ⅰ』
ケ1	五輪塔	火輪	ト26 G 火輪	四条通～五条通間、南外
ケ2	五輪塔	火輪	ト35 D11EⅡ 火輪	一条通、北外
ケ3	五輪塔	火輪	ト46 G 火輪	四条通～五条通間、南外
ケ4	五輪塔	火輪	ト23 D34EⅠ 火輪	下立売通、城内
ケ5	五輪塔	火輪	ト27 G25EⅢ 火輪	万寿寺通～五条通間、南外
ケ6	五輪塔	火輪	ト18 G19WⅠ 火輪	松原通下る、南外
ケ7	五輪塔	火輪	ト24 No.19-1 火輪	二条通下る、南外『年報Ⅰ』
ケ8	五輪塔	火輪	ト17 No.17 火輪	竹屋町通、南外『年報Ⅰ』
ケ9	五輪塔	火輪	ト28 G17EⅡ 火輪	松原通上る、南外
コ1	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ9 D19EⅢ 供養碑	上長者町通上る、北外『年報Ⅲ』図版74 ㊦D40-1 ㊦D区40 応永28年(1421) 地点不一致
コ2	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ12 ー 供養碑	不明
コ3	供養碑	供養碑、平頭	ヒ21 X-7 ー	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』、原山1987年の11 PD25Ⅲ 寛正2年(1461) 地点不一致
コ4	供養碑	供養碑、頭部欠損、縦割れ	ヒ23 X-7 供養碑	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
コ5	供養碑	供養碑、上半部欠損	ヒ1 X-1 供養碑	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
コ6	供養碑	供養碑、頭部欠損	ヒ25 X-7 ー	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』

群列	種類	観察所見	資料の番号・出土地・種類	東西通名、地点・『年報〇』掲載・備考
コ7	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ11 X-1 供養碑	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
コ8	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ13 X-1 供養碑	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』
コ9	供養碑	供養碑、尖頭	測量図になし	不明
コ10	供養碑	供養碑、尖頭	測量図になし	不明
コ11	墓標	笠部	測量図になし 砂岩か？	不明
サ1	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ4 D17～18EⅡ～Ⅲ 供養碑	中立売通～上長者町通間、北外『年報Ⅲ』図版74 X6-21 X-6濠1 文安2年(1445)
サ2	供養碑	供養碑、尖頭、縦二分割	ヒ5 D18～19E 供養碑	中立売通～上長者町通間、北外『年報Ⅱ』図版51 X1-14 X-1濠1石垣2 地点不一致
サ3	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ14 X-1 供養碑	下立売通上る、城内『年報Ⅲ』図版74 X7-11 X-7濠1 応永10年(1403) 地点不一致
サ4	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ22 X-7 供養碑	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
サ5	供養碑	供養碑、上半部欠損	ヒ10 No.52 供養碑	出水通、城内『年報Ⅱ』
サ6	供養碑	供養碑、上半部欠損	ヒ2 D22EⅡ 供養碑	上長者町通～下長者町通間、北外
サ7	供養碑	供養碑、上半部欠損	測量図になし	不明
サ8	供養碑	供養碑、上半部欠損	測量図になし	不明
サ9	供養碑	供養碑、上半部欠損	測量図になし	不明
シ1	道標	道標	ヒ16 D20Ⅱ 道標	上長者町通、北外「御料局」明治以降
シ2	灯籠	笠	ト40 X-1 ー	下立売通上る、城内『年報Ⅱ』 砂岩？
シ3	供養碑	供養碑、上部欠損	ヒ15 No.24 供養碑	榎木町通、城内『年報Ⅰ』
シ4	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ17 D40E 供養碑	榎木町通下る、城内『年報Ⅲ』図版74 ㊦D40-2 ㊦D区40 砂岩？
シ5	供養碑	供養碑、頭部欠損、縦二分割	ヒ6 No.24 供養碑	榎木町通、城内『年報Ⅰ』図版34 No.24-4 No.24濠1埋土 長祿4年(1460)
シ6	供養碑	供養碑、尖頭	ヒ24 X-7 供養碑	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』
シ7	供養碑	供養碑、頭部欠損	ヒ19 X-7 供養碑	丸太町通上る、城内『年報Ⅲ』 砂岩？
ス	墓標	墓標の台座、反花	タ33 No.15 台座	榎木町通、城内『年報Ⅰ』
セ1	五輪塔？	円形の凹部あり	ト11 D18～19E 地輪	中立売通～上長者町通間、北外
セ2	加工石材	石柱状、1面に凹部	タ2 D18～19 ー	中立売通～上長者町通間、北外
セ3	石臼	石臼、つき臼	タ40 X-6 ー	榎木町通、城内『年報Ⅲ』
ソ1	加工石材	長方形の切石	タ15 ー ー	不明
ソ2	加工石材	長方形の切石	タ6 石垣9 ー	不明
ソ3	加工石材	長方形の切石、円形の凹部	タ3 D18～19 ー	中立売通～上長者町通間、北外
ソ4	加工石材	長方形の切石	タ16 No.18 ー	竹屋町通～夷川通間、南外『年報Ⅰ』
タ	墓標	墓標の台座、中央に凹部、反花	ト36 ー 台座	不明

※ 不明：出土地点記載なし
城内：旧二条城内 北外・南外：旧二条城外

の測量図は6点が描かれ、後に3点追加されたようである。

シ列：南端に配置された供養碑列3列のうち一番奥（南側）の列で、供養碑など7点が一列に配置される。左端2点は樹木に隠れて観察しにくい。

ス：墓石の台座1点単独で置かれる。方形の大型品で側面には反花を彫り出す。西・南側は欠損する。

セ列：3点あり、唯一園路の外側に置かれる。現況は草木に隠れており、見落としやすい。

ソ列：長方形の切石が4点一列に並べられている。

タ：1点のみ。見落としやすい。

出土地点の検討 資料の一覧表には石造物の出土地点（調査区）が記載されおり、表4ではそれらを「出土地」として記した。

旧二条城の南北推定範囲は、北は出水通、南は丸太町通上る、である。したがって、出水通、下立売通、榎木町通、丸太町通上る、沿いの調査区から出土した98点が旧二条城内からの出土で、それより北側の「中立売～上長者町 溝」から出土した28点と「上長者町～出水 溝」から出土した

5点の合計33点は、旧二条城より北側の出土であることは前述したとおりである。

さらに、表4から出土位置の検討を進める。まず旧二条城の範囲に含まれる調査区としては、「No.14」（2点）・「No.15」（3点）・「No.24」（3点）・「No.52」（5点）・「No.53」（2点）・「X-1」（16点）・「X-6」（12点）・「X-7」（14点）と「D31」（2点）・「D34」（1点）・「D40」（1点）があり、61点が出土している（表4では「城内」と表記）。この中でX-1、X-6、X-7出土品が42点と城内の大半を占める点は注目すべきである。

これに対し「No.10」「No.13」「No.16」「No.32」「No.39」と「C42」「D5～D26」の35点は旧二条城の北側からの出土である（「北外」と表記）。また「No.17」「No.18」「No.19」「No.20」「No.27」「No.35」「No.48」と「G」が付く26点は旧二条城の南側からの出土である（「南外」と表記）。さらに「石垣9」「石垣19」と「出土地不明」が22点ある（「不明」と表記）。

結果、竹林公園に置かれた石造物144点では、旧二条城の範囲内から出土したものが61点、城の北側からの出土が35点、南側からの出土が26点、不明が22点であり、旧二条城で石垣などに使用された可能性があるものは全体の43%であること、石垣9・19の6点を旧二条城の堀に伴う石垣と考えたととしても67点で47%となり、半数に達しないことが明白となった。⁴⁾

設置時の状態 竹林公園の開園は昭和56年（1981）6月である。石造物群の設置については造園業の庭師に委託されたこと、分類された後、類似するものが集められて配置されたとのことであった。その際には測量図が作成され、一覧表は文化財保護課で作成されたとのことであった。⁵⁾

京都市考古資料館は昭和54年（1979）11月に開館し、1階東側には石仏コーナーが設けられ、石仏・石造物21点が展示された。⁶⁾ 当然、ここに並べられた石造物群は竹林公園の開園（昭和56年6月）には間に合わなかった訳で、石仏についてはA列後半にそれらが並べられたことを前稿で述べ



石仏コーナー

写真1 京都市考古資料館「石仏コーナー」に展示された石造物群
（『京都市考古資料館年報』昭和54・55年度 P26）

た。石造物についていえば、この中に板碑3点と一石五輪塔1点が含まれており、その一石五輪塔は資料の測量図を見るとカ群は10点が描かれるもの実際は11点あり、カ11が遅れて置かれたとみてよい。事実、『昭和54・55年度 京都市考古資料館年報』P26の写真にはカ11とみられる一石五輪塔と尖頭の供養碑が写し込まれており（写真1）、同年報P17展示資料には「板碑3」「一石五輪塔1」とある。供養碑の番号までは確定できないが、コ列とサ列は測量図と現状を比べるとそれぞれ3点ずつ追加され、コ1・コ3・サ2・サ3は資料による出土地点と『年報Ⅱ』『年報Ⅲ』などに掲載された写真との照合から出土地点が一致しないことが判明するため、石仏展が終了した時点で竹林公園に移された際にコ列とサ列で配置換えがあったことが想定される⁸⁾。なお石仏展は昭和54年11月から昭和56年10月までの2年間開催された。

5. 石造物の観察（表5・写真2・3）

石材 大半が花崗岩であるが、細分については示すことができない。花崗岩以外では砂岩とみられる石材がある（シ2、シ4、シ7）。類似する石材は石仏にも1点（H2 地蔵菩薩立像）認められる。

石造物の種類 『年報Ⅲ』表-38（表2）で分類・整理されている。石碑は34点あり内訳は供養碑31点・不明3点である。石塔は39点あり内訳は五輪塔23点・宝篋印塔1点・層塔4点・灯籠4点・不明7点である。建材は23点あり内訳は礎石17点・礎盤2点・不明4点である。その他35点を加えた合計131点とすることは先述した。

今回は、旧二条城域とその外側で種類ごとの構成比を検討するため、表5を作成した。それによれば、旧二条城の範囲内は供養碑、墓標、五輪塔・宝篋印塔の比率が高く、これらは墓地から運ばれたことが推定される一方で、礎石・礎盤や灯籠・層塔など、幅広い部材も運ばれている。城の北側では五輪塔、加工した石材が多い反面、灯籠などは含まれない。城の南側では五輪塔が多い点は

表5 石造物の種類と地点ごとの点数（表4から作成）

種類 \ 地点	城内	北外	南外	不明	計
五輪塔・宝篋印塔	14 (23%)	14 (40%)	15 (57%)	3 (14%)	46 (32%)
供養碑(墓標含)	15 (25%)	5 (14%)	0 (0%)	8 (37%)	28 (19%)
加工石材(不明含)	7 (11%)	9 (25%)	1 (4%)	6 (27%)	23 (16%)
礎石・礎盤	11 (18%)	4 (12%)	1 (4%)	4 (18%)	20 (13%)
灯籠・層塔(石塔含)	10 (16%)	0 (0%)	1 (4%)	1 (4%)	12 (8%)
石臼・手水鉢	3 (5%)	1 (3%)	6 (23%)	0 (0%)	10 (7%)
石 樋	0 (0%)	0 (0%)	2 (8%)	0 (0%)	2 (2%)
唐 石 敷	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
道 標	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
石 仏	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
計	61 (100%)	35 (100%)	26 (100%)	22 (100%)	144 (100%)
石造物計	61 (43%)	35 (24%)	26 (18%)	22 (15%)	144 (100%)

共通するが、石臼・手水鉢も多く、供養碑などが含まれないことが特徴となっている。これらの差異は微妙であるが、特徴を知る上では有効であろう。

①**供養碑** 頭部が尖頭を呈する「板碑形」と称されるものと、平頭のものがある。コ列・サ列・シ列に集められている。前面を平滑に調整し、銘文を刻む。中央上部に梵字と「南無妙法蓮華經」の題目が刻まれ、左右に故人に関する記載がある。今回は銘文の細部までは観察できなかったが、内容については『年報Ⅲ』P285の表-39で整理されており⁹⁾、年号を記すものは13基あり、延文元年(1356)から天文3年(1534)までであること、15世紀中葉が多く、室町時代前期末から後期前半に集中するという。注目されるのは石碑の左右両側面に題目を刻むものが2例(シ5と文明18年銘で未報告とあるもの)、裏面に年号を刻むものが2例(『年報Ⅱ』図版51のX1-15とX1-16、ともに展示なし)確認されていることである。これらの特徴は江戸時代中頃以降に普及するとされるからである¹⁰⁾。

②**五輪塔** 下から、地輪・水輪・火輪・風輪と空輪の各部位を積み上げたもので3点(カ5・カ8・カ9)あり、カ群に集められている。積み上げられたものは、個々出土地点が異なり、当地で適当な部位が選別され、積まれたと判断できる。なお風・空輪は一体造りで破損しにくいので、出土点数が多い。キ列は風・空輪、ク列とケ列は火輪を一行に配置している。一石五輪塔は一石から5つの部位を削り出したもので、カ群に5点(カ1・カ2・カ3・カ6・カ11)集められている¹¹⁾。この他、反花が表現されたエ10・ス・タは、墓標の台座と判断できる。

③**灯籠** ウ3は竿の上に笠が乗せられ、中台・火袋は省略されている。なお灯籠の先端に付く宝珠は五輪塔の風輪・空輪と区別できない。笠はシ2にもある。

④**層塔** 軸が2点(ア4・カ4-2)と笠が3点(ウ4・カ4-3・カ7-2)ある。軸の四面には如来形の坐像が浮彫りされる。カ7-2は地輪の上に直接層塔の笠が乗せられており、当地で不自然な形に復元されてたといえる。

⑤**礎石** 円形柱座を造り出すものが多く、代表的な個体はイ列で飛石として置かれている。方形の柱座を表現するものがある(エ12・エ13)。表面が整えられたものでは礎石かどうか判定できないものもあり、これらはア群、エ列、オ列に集められている。

⑥**石臼** ひき臼、茶臼、つき臼などがある。ひき臼は、臼石を回転させることで穀物を磨り潰すためのもので、上に乗る上臼、台石部にあたる下臼からなる。上臼は上面を窪ませ、中心からはずれた位置に穀物を下に落とすための孔が開く。磨り面には刻目が施される。石臼は反時計回りに回転させて粉を外に出すものであるが、この反時計回りの回転方向は右腕の力を最大限に発揮させるためとされる。茶臼は茶葉を粉末にするための石臼で、1点(エ20)確認できる。つき臼は杵を用いて穀物を砕くための石臼で、2点(エ14・セ3)確認できる。

⑦**手水鉢** エ5とオ12の2点を確認できる。エ5は上面の調整が雑で、礎石など既往の製品に穴を穿つことで手水鉢として再利用された可能性がある。

⑧**加工石材** ア7・ア8・ア9は縦に溝が二条あり、個体の側面は90度をなし、同じ個体を4点合わせると内部に十字形の空間が形成される。十字型の軸に本品を巻きつかせるような構造が想定されるが、具体的な名称までは提示しえない。



1 ア3(唐石敷)



2 ア4(層塔の軸部)



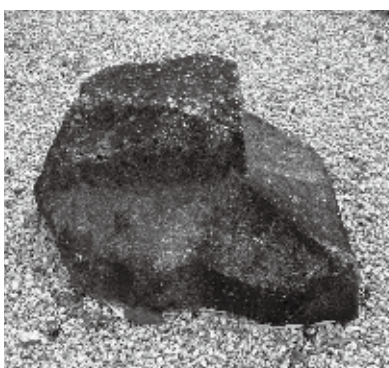
3 ア7(左)・ア8(右、ともに縦の溝を刻む)



4 イ3(礎盤)



5 ウ3(灯籠)



6 ウ4(層塔の笠)



7 カ4(層塔)



8 カ7(地輪・層塔の笠)



9 カ11(一石五輪塔)



10 コ11(墓標の笠)

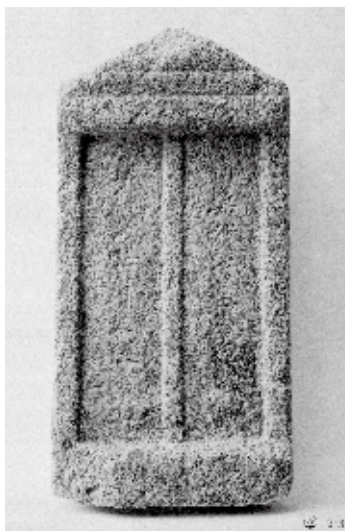


11 サ2(左)・サ3(右、ともに供養碑)



12 シ2(灯籠の笠)

写真2 石造物の現況



『年報Ⅰ』図版35 ㊦9-3
石碑(供養碑) 高58cm



『年報Ⅱ』図版51 X1-15
石碑(供養碑) 高52cm



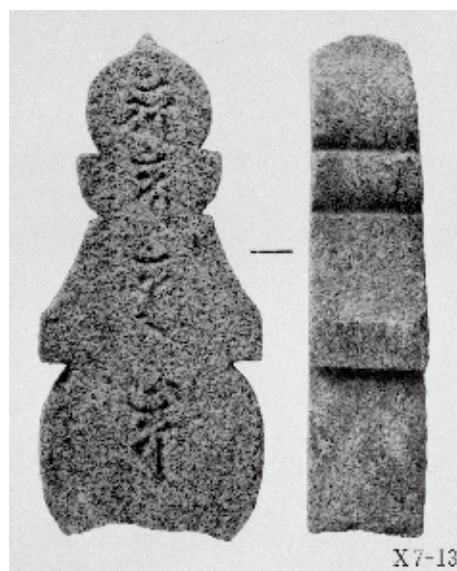
『年報Ⅱ』図版51 X1-19
灯籠笠部 一辺23cm、高22cm



『年報Ⅱ』図版51 X1-16
石碑(供養碑) 高52cm



『年報Ⅱ』図版51 X1-13
石碑(供養碑) 高73cm



『年報Ⅲ』図版74 X7-13
石塔(五輪塔形) 高62cm

写真3 『年報Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』に掲載されながら竹林公園に展示されていない石造物

⑨石仏 前稿で検討を加えた石仏は、今回の検討範囲に1例確認できた(エ9)。石仏の光背の部分である。結果、石仏の総数は1つ増加して215基となる。

竹林公園に設置されなかった石造物 烏丸線の調査で出土した石造物では、たとえば『年報Ⅰ』図版35に掲載された㊦9-3(尖頭の供養碑)、『年報Ⅱ』図版51に掲載されたX1-13(尖頭の供養碑)、X1-15(平頭の供養碑)、X1-16(平頭の供養碑)、X1-19(灯籠の笠)、『年報Ⅲ』図版74に掲載されたX7-13(五輪塔形の石塔婆)などは当地で確認できない。写真を見る限り保存状態はいずれも良好であり、別地点で保管ないし展示されていると推定される。出土した個体すべてが竹林公園で保管・展示されている訳ではないことは、改めて認識しておく必要がある。

6. まとめ

前稿では竹林公園に展示された石仏を検討した。本稿はその続編として石造物144点について、配置状況、出土地点、型式、種類、特徴などを整理した。以下、要点を箇条書きで記す。

①配置はア群～タまで16群（列）に区分できた。

②出土地点は旧二条城の範囲内が61点、城の北側が35点、城の南側が26点、不明22点で、旧二条城内は全体の42%にとどまる。石仏に比べると他地点出土のものが多い。

③当地に設置される以前、京都市考古資料館で展示され、終了後当地に移されたものが4点（供養碑3点、一石五輪塔1点）ある。

④種類については、設置時には石碑34点、石塔39点、建材23点、その他35点、合計131点とされたが、今回の整理では、多いものから五輪塔・宝篋印塔46点、供養碑（墓標含）28点、加工石材（不明含）23点、礎石・礎盤20点、灯籠・層塔（石塔含）12点、石臼・手水鉢10点、石樋2点、唐石敷1点、道標1点、石仏1点、合計144点、に分類した。

⑤烏丸線年報に掲載されながら、当地に運ばれなかった石造物が数点ある。

以上が要点である。格別の新知見が判明したわけではなく、園内に置かれた石仏・石造物がはたしてどの地点から出土したものか、その由来を明らかにすることを目的としたことを前稿で述べたが、本稿と合わせることで一応の目的は達したと考える。ただし出土地点については、個々の注記（マーキング）を確認したわけではなく、資料にある出土地点を前提にしたため、設置後に移動させられていたなら結果に差が生じることを断わっておきたい。

謝辞：本稿を作成するに当っては、玉村登志夫、西村万里氏にご協力、ご教示いただきました。記して感謝いたします。

註

- 1) 『年報Ⅰ』：『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』1974,75年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979年
『年報Ⅱ』：『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1976年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
『年報Ⅲ』：『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』1977～1981年度 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981年
- 2) 観察にあたっては竹林公園のご配慮をいただいた。
- 3) 前稿（P57の上から14行目）では「石造物はア群～スまで13列（群）に配置され、総数128基ある」としたが、今回の数値が正しいと考える。
- 4) 前稿で示した石仏の場合は、旧二条城の範囲からの出土が141点、その外側が73点で、圧倒的に「城内」が多い。石造物は出土地不明のものも多く、これらは他地点から竹林公園に持ち込まれたものであろう。

- 5) 玉村登志夫氏のご教示による。
- 6) 『京都市考古資料館年報』昭和54・55年度 京都市考古資料館 1981年3月 P17「展示資料 昭和54年11月～昭和55年10月」に「石仏コーナー」として21点の内訳が記される。
- 7) 資料に記載された出土地点と『年報』の図版に掲載された写真から出土地点の不一致が確認できた例。
 1. イ3は資料では「ケ11 D31WⅡ～Ⅲ」で出土地点は出水通下るであるが、『年報Ⅱ』図版51の「X1-20 X-1濠1石垣3出土」と同一であり、X-1は下立売通上るである。
 2. コ1は資料では「ヒ9 D19EⅢ」で出土地点は上長者町通上るであるが、『年報Ⅲ』図版74の「㊦D40-1 D区40」と同一であり、出土地点は榎木町通下るである。
 3. コ3は資料ではX-7で出土地点は丸太町上るであるが、後述する原山充志1987年（註9）資料10一覽表11の「㊦D25Ⅲ出土」と同一であり、出土地点は下長者町通である。
 4. サ3は資料では「ヒ14 X-1」でX-1は下立売通上るであるが、『年報Ⅲ』図版74の「X7-11 X-7濠1」と同一であり、X-7は丸太町通上るである。
- 8) コ列・サ列・シ列の現況を見ると、コ1～コ3、サ1～サ4、シ4というように保存状態が良い個体は左端に集められており、見栄えを良くするための処置であったと思われる。したがって、京都市考古資料館で展示されていた見栄えの良い供養碑3点は竹林公園に移された際左端に置かれ、それに伴い全体が右方向に動かされたため、出土地点の不一致が生じたとみられる。
- 9) 原山充志「地下鉄烏丸線で発見された遺物について」『第6回京都市考古資料館文化財講座資料』京都市考古資料館 1987年1月
- 10) 京都市考古資料館と立命館大学文学部考古学・文化遺産専修との合同企画展『布と石の考古学入門』（平成29年12月12日～平成30年1月21日）では、高正龍教授の指導のもと市内各所の調査で出土した墓標を年代順に展示しており、側面に文字を刻むものは17世紀後半頃から増加するという。
- 11) カ群の一石五輪塔5点はすべて花崗岩で造られているが、（註10）での室町時代から桃山時代の一石五輪塔は、はんれい岩（閃緑岩とする見解もある）が大半であるため、石材の変遷は、花崗岩からはんれい岩（閃緑岩）へ、そして花崗岩から和泉砂岩という変遷があったことになる。

前稿（『洛史 研究紀要 第11号』）に誤植がありました。訂正をお願いいたします。

箇所	誤	正
55頁 下から11行目	5基（石仏3、石造物2）が掲載	5基（石仏3、石造物2）、図版35に4基（石仏3、石造物1）が掲載
57頁 下から7行目	昭和59年11月には	昭和54年11月には
58頁 表1 A55	阿弥陀如来 坐像	阿弥陀如来 立像
63頁 上から9行目	地藏菩薩像が2基（I4・O3）	地藏菩薩像が3基（H2・I4・O3）

また、前稿の表1では出土地「D15」「D17～」「D18～19E」などを「中立売通～上長者町通間、『年報Ⅱ』」としたが、所収する報告書名は不確定と考え、今回の表4では提示しなかった。